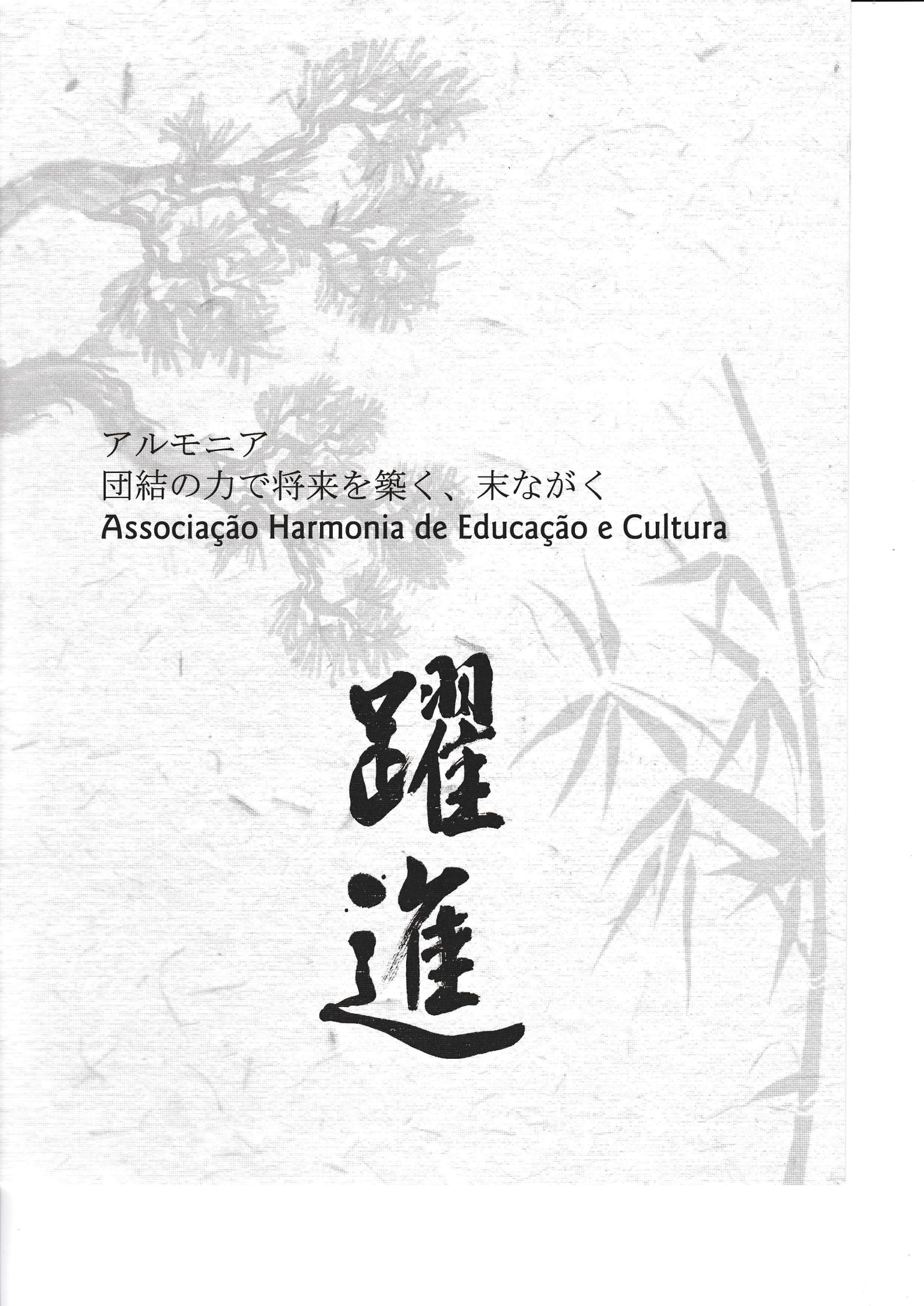




アルモニア

団結の力で将来を築く、末ながく

Associação Harmonia de Educação e Cultura

躍進

アルモニア教育文化協会 (Associação Harmonia de Educação e Cultura) (以下アルモニア) の歴史は、自分自身の仕事や私生活を犠牲にし、連帯精神に徹し、且つ近代社会人として将来の役割は如何なるものかを見通した偉大なる人達が築き上げたものである。そして、1953年の創設以来今日までの事業の実績記録は確実な功績の積み重ねの歴史であり、ことにこの事実は日本移民が子弟の教育を如何に重要視したかという成果に他ならない。

アルモニア学園は現在、幼稚園から高校まで370人の生徒が全日制で勉学に励んでおり、それは今尚残る移民達の努力の成果とも言えよう。アルモニア学生寮の元寮生たちが、ブラジル社会の幅広い分野に於いて目覚ましい活躍を見せている事実は、ブラジル日系社会にとって、またブラジル国家にとっても移民の人達の努力の貴重な遺産である。

アルモニアのプロジェクトが次々に実現してきたことは、過去の豊富な実績と確固たる地盤に基づいて、創立当時から営々と築き上げられて来た現実と未来であり、将来に続ける着想と励ましになっている。

アルモニア学生寮は創立60周年記念を迎え、現在は教育機関として機能しているが、創立者達の革新的な趣旨はそのまま現代まで受け継がれている。その創立の趣旨とは、日本人移民が持ち込んだ文化及び道德観念をブラジル社会に伝承し、人間関係の調和 — アルモニア名称の起源 — を確立し強固なものにする。そうして、国家発展に有為な人材を育成し、ブラジル社会に貢献することであった。

教育分野に於いてアルモニアは、運営者も認める通り生徒数を限定し、質の高い独自の教育 — 正規の学校教育以外に日本人の倫理原則を伝承することによる学生の人格形成 — を心がけている。夢があっても、それは生徒数を以て巨大な学校と競争することではない。

アルモニアは、地域はもとより地域外に於いても参考、または手本となるように最善の努力をはらっている。

この新しく高度な教育の質を達成する手段は、当然のことながら時代の流れに適応させたものではあるが、多くの場合、学生寮の創立者達が6, 70年前に策定した方法に似ている。

それは、個人や団体といったつながりを超えて、精神に基づいた協力を基本としている。それらの中には、移民の趣旨を貫こうとする者、元寮生、日系社会一般、日伯両国政府、資本系統とは無関係な日本の進出企業、そして、価値観及び学校教育の原理原則に留意する者があげられる。

他国からの移民グループも、この運動に刺激を受け、特に本国からの資金援助によって学校を設立し、それぞれが自国の文化及び言語の普及に努めることで、現在、そういった学校が、サンパウロ及びブラジル各地に於いて質の高いモデル校となっている。

この教育事業は、各国から移民が始まった年代とは関係がない、また関係があってはならない。ブラジルへのドイツ移民は、19世紀半ばに始まり、その最も主要な学校は100年以上の歴史を持つ。スペイン移民は、ドイツよりも少し

遅れて始まっているが、設立された学校はわずか30年前のものである。しかし、その優れた教育内容は急速に頭角を現し、サンパウロでも高く評価されている。これら2つの国の特徴は、本国からの決定的な援助を受けていることである。同様に、イギリスも英語及び英国文化普及のため、本国の援助を受けて学校という組織を拡大している。フランス政府も、高校の維持以外に教育法及び資金面において支援し、評価の高い母国語教育網を構築している。

ブラジルには、150万の日系人が日本移民とその子孫として象徴されているにも関わらず、なぜ、教育分野に於いて日伯両国の不可欠な支援を得てその文化遺産を継承していかないのだろうか。

もちろん、アルモニアは、教育法及び資金的な援助が得られるならば、これら文化的遺産を継承するプロジェクトを実施する準備は十分に整っている。60年という歴史が、そのまぎれもない証拠だ。

第2次世界大戦終了後間もなく、当時サンパウロにしか無かった大学に子弟達を通わせるために、学生寮の設置を思い立った男達には先見の明があった。恐らく、その時既に多くの移民達よりも早く、自分達、そして子弟達の永住の地は、ブラジルである事を見抜いていたのだろう。だからこそ、子弟達にはブラジルに於いて正式な教育 — 中でも、日本文化の価値観及び日本の道徳を継承した、内容の充実した教育 — を受けさせなければならないという使命をもったのである。

移民の子弟で、最初にサンパウロの大学を目指した学生は、粗末な下宿、ほとんど場合、湿った地下室のような不衛生的な場所で我慢するほかなかった。家族から送られてくる少ない小遣いでは、まともな食事にもあり付けるはずもなく、学習に打ち込める空間もないまま、不慣れな都会で道を踏み外す危険にも晒されていた。

この状況を深く憂慮した移民の一グループは、移住当初から日本への帰国という選択の可能性が、極めて少ない事を意識して、子弟達をブラジルで教育し、善良なブラジル国民として育成する意思を固めたのである。1897年、当時東京には基督教の影響を受けた組織である「力行会」に属した者が多く、その者達は、始めはアメリカへの移住、その道が途絶えた後はブラジルへと海外移住を志す青年達を教育する趣旨をもっていた。

彼らは、責任ある市民として、サンパウロで大学に通う子弟たちを支援する事の重要性を十分に認識していた。しかし、この学生を支援する事業を推進するために持ち合わせていたのは、理想とやる気、そして乏しい自己資金だけであった。

破魔六郎、輪湖俊午郎、井原恵作、森晋平、本田慶三郎、野上豊、村上真市郎、佐藤常蔵、二木秀人は、Associação Harmonia de Educação e Cultura (アルモニア教育文化協会)の前身であるSociedade Amigo dos Estudantes de São Paulo (Saesp—サンパウロ学生会—以下「学生会」)の創立者であり、移民の子弟の宿舎を都心の近くに設ける事が重要な第一歩であると認識していた。

「自分のために生きること、家庭を築くこと、そして、働いて社会的地位を向上させる事は、(人間の)常道である。」これは、創立者であり初代寮長であった二木秀人が残したアルモニア創立40周年記念の際の言葉である。

「しかしながら、私ども力行会の者は、本当の男とは、単に自分の人生を生きるだけでなく、それ以外に何かしなければならない事を知っていた。グループのリーダーである破魔六郎は既にブラジル人であり、将来この国で家庭を築き、ブラジルという国で暮らす次世代の若者達に何かしてやろうと提案した。」

1948年に発表された文章で、破魔六郎(二木が先に挙げた)は、ブラジル日

本移民の子弟養育のために学生寮を設立する趣旨について下記のように述べた。
「財産を遺すこと以上に、我々の子弟には勉学の機会を与え、将来ブラジル社会の如何なる分野に於いても、この国に住む他国又は他人種の子孫たちと肩を並べる事が出来るだけの人間として成長させる事が重要である。そして、その子弟が独自の道を切り開き、広汎にブラジル及び世界の文化的向上、さらに平和のために貢献できるようになれば、これ以上の喜びはない。」

創立者達が企画したこの学生寮は、子弟たちが大学へ入学するための準備をする場所でありながらも、家庭的な雰囲気の中で勉強ができるという特徴も持ち合わせていた。そこでは家族、友人達と会う事も出来た。以前の下宿では、環境が悪すぎて住むことも誰かを迎える事も出来なかった。宗教を基本とした力行会の事業ではあったが、企画した寮には、一切宗派的な強制又は要求もしないものとした。

同時に、多くの学生がサンパウロの奥地出身であることから、創立者達はこの場所に於いて、日系ブラジル市民としての道徳的感覚を身につけ、社会生活に挑戦する心構えについても訓練する事を意図した。

しかしながら、この学生寮の発案は、当時ブラジルで過度期にあった日系社会に於いて、非常に飛躍した大胆な考え方であった。祖国日本が第二次世界大戦で敗北したことで、悲嘆のどん底に陥れられた者が多くいた。その者達が、敗戦を受け入れない日本人達の起こした騒動に巻き込まれるという事態が発生したのである。日系社会は真っ二つに割れ、一方は日本の戦勝を信じ「勝ち組」と称され、もう一方は状況を認識し敗戦の事実を知っていたので「負け組」と名付けられた。この闘争は、数十件にもものぼる襲撃事件に発展、20人以上の犠牲者と数百人の負傷者を出し、日本人同士及び子弟達の共存に深い傷跡を残す結果となり、完全に回復するまでに長い年月を要した。

先の開拓者達の基本的な考えは、「子弟たちはブラジル国民であるため、この国で教育を受けなければならない。」というものであった。しかし、二分していた当時の日系社会では、彼らが実行しようとしていたこのプロジェクトは、すんなり受け入れられる状況ではなかったのかもしれない。それだけ、飛躍した大胆な発想であった。それでもなお、アルモニアの先駆者達は、たくさんの期待を持っていた。その中の一つとして、子弟を保護する施設（学生寮）の建設は、日系社会における融和（アルモニア）の復活につながるのではないかと、という願いも込められていた。

しかしながら、この事業を短期間で実施する上で、彼らには大きな仕事があった。始めに、事業を開始するためのあり合わせの資金を集めること、それに友人、特にブラジル力行会関係者へ会員として協力を求める呼び掛けを行うことである。こうして集められた資金は、プロジェクトに見合う敷地を購入するに十分足るものとみられた。

将来、学生寮を建築するために選ばれた敷地は、当初不適切とみられた。しかし、時間の経過と共に最適な地である事が分かってきた。購入を計画した敷地は僅か数年前に開通した「アンシエッタ街道」に面しているからである。この道は、ブラジルで最も交通量の多い街道の一つで、サンパウロとサントス港という国の経済最重要都市を繋ぐブラジルの最良道路とも言われている。

開拓者達が選んだのは、サン・ベルナルド・ド・カンポ市で、その後自動車産業の中心地となり、長い間ブラジル経済を牽引する地域となった。この事は、単なる偶然であろうか。いや、偶然ではない。市が発展したのは、アルモニア学生寮が出来た後に起こったことであることを思い起こしてほしい。

1940年代末、当時購入した13,000平米の敷地の周りには、殆ど家屋がなかつ

た。旧メニーノス区（現在のルージ・ラーモス区）の高台にある敷地からは、街道をサンパウロ又はサントス向けに走るトラックやバス、少数の乗用車を直に見て、数える事が出来たほどであった。

土地を購入したのはいいものの、次の段階は学生寮の建築費であり、これは土地より遙かに多くの資金が必要であった。従って、資金調達は単に学生会の関係者だけで賄う事は出来ない。力行会のメンバーが主体となって宣伝活動を展開すると同時に、組織に属していない日本人家庭など関係者以外にも呼び掛けた。数年後、事実上ブラジル日本移民全体の事業となったのである。先駆者達をここまで駆り立てるのは、大きな理由があった。

「力行会は、移民が持ち込んだ価値によって日系社会を目覚めさせ、ブラジル日本移民の成功の原動力であった。」本誌編纂にあたり協力頂いた1954年、学生寮第1期生の元寮生、現アルモニアの顧問で、日系社会に於いて最も知名度の高い、元高等判事の渡部和夫法科大学教授は、こう語った。

日本移民達が多量に持ち込んだ価値の中でも普遍的なものは、ブラジルに於いて「その子弟の将来を約束するものが、適正な教育以外にはない」というものであった。19世紀末、西洋人が初めて日本を見た頃、「国の構造の基礎となっているものは教育である。」と言った事を、彼らはよく知っていた。現在まで、この価値を受け継いでいるその子孫たちの影響は、ブラジル人が日本人の特性及び概念をイメージする時にも大きく作用しているのである。そこに、渡部教授がブラジル日本移民の成功の原動力となったと言い切る根拠がある。

こうした見地からも【家族が住んでいる地域では十分に勉強ができない子弟のために、都会へ出る目的として宿舍を建設するという計画】に対し、協力する機運が十分に高まってきたのである。事実として、大きな反響と支持があった。当初は、発案者が自分たちの子弟のために、と始めたものであったが、やがては日系社会全体の話題として取り上げられるようになり、それが実現し、現在まで継続され保たれている。

ちょうどその頃は、ブラジルに於ける日本移民の生活が苦しい局面に差し掛かった時期にも拘わらず、発起人達は、サンパウロ州及びパラナー州の移民の大きな集団地を訪問し、事業の計画や趣旨を説明、協力要請運動を展開した。移民達の資金協力を得るために、日本語で書かれた「進路」と呼ばれる小冊子を用意し、ポルトガル語のページには「Vereda（行き先）」という題を付けていた。

「一度こんな事があった。多分オリエンテ植民地（現在のペレイラ・バレット市、著者注）であったと思うが、近隣の人達から、あそこはだれも協力をしないから訪問するのを止めた方が良い、と言われた。」地方周りに使用された車の所有者である野上の話を想い出し、息子のパウロ・ショウイチ・ノガミがその著書で以下のように述べている。「それでも巧みな弁舌家であった輪湖さんは、牛草茂さんと一緒に行き（...）。意外と寄付を貰う事が出来た。」

さらに、「訪問した先々で、皆さんが積極的に協力してくれた事は、我々にとって大きな励みとなった。」しかしながら、奥地の道なき道を強行突破した野上の車が犠牲となった。「私が運転していたイギリス製のフォード車は完全に破損した。」プロジェクト実現のために蒙った大きな物的犠牲であった。

多くの家族が協力してくれたものの、折からの経済不況のため、その多くはあまり大きな金額ではなかった。しかしながら、その協力は丁重に記録され、詳細にわたって「進路/Vereda」に掲載し、日系社会に広く伝えられ、徐々にその効果を表してきた。

最終的に、建設費が目標達成されたとみなされた時、その額は敷地代の約10倍に相当するものとなっていた。畑中ツギオ及び久保田輪吾が所属するグルー

プの建築科学生が、野村ジョルジェの監督の下で設計を進めた。「設計は完璧ではなかったかも知れないが、誠意を以て大学の新入生のような意気込みで作成した。」と、アルモニア学生寮10周年記念式典の際、学生会の役員が改めて振り返った。

当然のごとく、この設計は、学生寮としての機能を的確に果たせるものであった。その装い、機能性、通気性、風通し、日照条件等は同種施設の設計に準じたものであった。さらには、将来の寮生の社会心理的な影響などを考慮し、内面的な部分にも配慮されていた。これらの配慮から寝室は二人用、食堂を広くして会議室、討論会、演奏又は読書用として複数兼用できるようにした。要するに、寮生が自分の家にいる気楽さを感じさせることを配慮したものである。工事は、塚本彰美とパウロ・ショイチ・ノガミ両技師が担当し、1953年9月に竣工した。

第1期生の13人は、建物2階部分の44人まで収容できる22部屋の一部と、図書室、食堂及び調理場を使用した。1954年には男子26人、女子7人合計33人が入寮した。工科（機械科及び土木科）、医科、農科、哲学及び法科大学への予備校生と、残り5人は高校生であった。

寮生の様子はどんなものであっただろうか？学生達は何をもたらし、何を求めていたのであろうか？「多くの学生が、此处へ来た時は田舎臭さを持っていた。内向的、倫理及び社会礼儀の無知、表現下手。」と、アルモニア学生寮創立10周年記念誌には書かれている。田舎の多くの学生は、こうした特徴を持っていた。これらの学生に手を差し伸べようと思い立ったのも、アルモニアの発起人達であった。

「学生寮は、一面野原の寂しい場所にあった。」と回想するのは、元エンジニアの和田忠義である。彼は、13人いた第1期寮生の一人であり、現在アルモニアの理事長を務める。本書編纂のためにインタビューに応じてもらった。孤立した寂しい所にあったが、寮生が落ち着いて勉学が出来る雰囲気であった。

「2人部屋でトイレは共同であった。」「寮生の監督は、創立者の一人である二木秀人先生で、非常に厳しかった。」と和田は言う。

早い時期に、創立者達は、サンパウロ市の高校又は予備校に通う寮生を連れて行くため、中古のバスを購入した。朝食が済むと、バスは寮生を乗せてサンパウロ市、リベルダーデ区のタグァー街まで送る。そこから先は、各々コレジョ・パウリスターノまたは大学の予備校へ向かった。

勉学以外に、寮生達は寮内での生活があった。下宿ではなく、創立者が常に欲していた通り、家庭的な雰囲気に配慮した。10周年記念誌に発表された通り、本当の意味での家庭の雰囲気を醸し出し、寮生が常に自己の体験又は将来の夢を語り合う空間であった。「アルモニア（学生寮）の指導のもとに健全な共存、外部の人達との社会的会合への参加、当番制による司会の任務等の訓練は、現在首都または地方都市の団体運営の任に当たり、リーダーシップを発揮している人材の輩出につながった。」と、10周年記念誌に要約されている。

寮生同士の仲間意識、及び理解ある指導者の世話は、親たちの慈愛を完全にカバーは出来ないまでも、一部その役目を果たしてきた。

これらすべての行動は、明確な目的を持って実施された。

「若者の育成及び人格形成、家族及び社会に対する責任感、リーダーシップの育成」である。

学生寮創立25周年記念式典の際、初代寮長の二木秀人は、施設の発展のため尽力したサン・ベルナルド・ド・カンポ市の2人の非日系人名士の名を挙げた。その一人は学生寮が竣工した時の市長で、奇しくも学生寮10周年の時も市長

を務めていたラウロ・ゴメス氏であった。

1963年、学生寮が一つの難題に直面する。それは、建物に通じる道路の舗装であった。雨の降る日は、泥や土の流れ込みを防ぐため砂を播いていた。ある雨の日、寮を訪れた市長が二木寮長に砂をまく理由を尋ねた。来客が泥で滑らないためにやっている、との説明に、即刻解決するため砂利を敷く事を約束した。

けれども、学生寮の創立10周年式典の日が差し迫っても市長からは何の音沙汰もない。寮長は痺れを切らして市役所へ出向いて抗議をした。「約束した事は必ずやる。」と市長は、明言した。市役所の職員一行が学生寮まで赴き、舗装する面積を測り、式典前日の夕方には砂利ではなくアスファルト舗装が出来上がった。「私は家内と共にまだ熱いアスファルトの上を歩き、涙ながら全てが計画通り運んだことを神に感謝した。」

初代寮長は、更にテルモメカーニカ社の建物とその社主、サルヴァドール・アレナ氏との関係を懐古する。ラウロ・ゴメス市長は市条例を以て、学生寮から500m以内に工場を設置する事を禁止した。

しかしながら、テルモメカーニカ社は寮から400mの地点に工場を設置する許可を取得。寮側としては、寮生の勉強と睡眠の障害になる事を心配した。市長に対し、市条例に違反して工場の設置許可を認可した事に対し抗議したところ、二木寮長はラウロ市長から次の説明と助言を聞いた。

説明：工場誘致は、市の発展に不可欠な条件である。

助言：寮の代表者が、会社を訪ね問題点を提議する。

この会社訪問は、通常なら紛争の種となったであろうが、本件に関しては極めて友好的な関係が始まることになった。サルヴァドール・アレナ氏個人負担で、寮の敷地内に室内競技場、野外にはマルチ運動場を建設、更に会社負担で寮の給水設備の補助まで提供してもらったのだった。

学生寮創立10周年を機に、学生会の理事長は、城島慶次郎にバトンタッチされた。城島理事長は、後にアルモニアの創立発起人であり城島の友人であった破魔六郎の息子である破魔浩一郎がその著書で述べた通り「アルモニア発展の鍵となった」人物である。アルモニアの第2棟建設は、基本的に城島理事長の発案と努力によって完成したものである。その計画は、学生寮が10年目を迎えた1963年9月22日に発表された。

城島理事長は、ブラジルにおける当時の田付景一日本大使の知遇を得る一方で、また多くの日本政府高官との人脈があった。こうした人脈を通じて、アルモニア第2棟建設資金の援助を日本政府から受けたのである。日本政府から援助を受けた関係から、1966年10月1日、椎名悦三郎外務大臣がアルモニア学生寮を公式訪問した。

第2棟の当初の設計は、他の設計技師とは一線を画している大竹ルイ建築師が先駆的な概念を以て起草し、円筒形ビルを2棟建設するものだった。しかしながら、その建築費は日本政府から受けた補助金を遙かに超えることから、理事会は既存の建物の増築という形を選択せざるを得なかった。

完成した3階部分の建物の総面積は1,600平米、講堂、ホール、貴賓室、教室、診療室を備え、1967年5月に竣工、寮生110人を収容できる規模となった。第3棟の建設プロジェクトは、施設が20年を迎えた時点で発表された。日本政府の援助及び私企業の支援を受けて1976年に完成し、収容能力は200人となった。

学生寮創立25周年記念に際し、元寮生の渡部和夫は、アルモニアの実績を

「施設は日本移民が継承してきた価値、即ち勤勉と誠実、子弟の教育への配慮が象徴されたものである。」と評価した。また、学生寮を建設するに当たり発起人達は、「子弟たちがブラジルの大きな社会の中で生活や仕事をするために教育をし、ブラジルの規範にそった職業訓練を身に付けさせる事」を目標にしたのである。これによって移民自身も子弟達と共に、ブラジルが単なる生国ではなく、選択として - ブラジル人 - となったのである。

施設が60年の間に収集した陳述の中に、学生寮で過ごした期間に受けた指導を的確に表現したものが多くある。中でも、1954年の寮生であった曾根原俊夫は、学生寮のきまりに関して、寮生に与えられていた各自の責任に基づき、準自立的な自由行動を想起する。また、「責任という考え方は、どんなに厳しいきまりにも勝る。」と、学生寮の40周年誌に発表した。「寮生に認められていた自由とは、アルモニア学生寮の精神の中核を構成しているのだ。」

「人格の形成」はアルモニアの特徴である、とアルモニア学生会の元会長内村ウーゴが強調する。職業活動において秀でているだけでは十分ではない。コミュニティの一員として人間的に優秀でなければならない。これを踏襲してきたことにアルモニアの存在価値がある。

けれども、アルモニア学生寮の理事たちは過去の成果だけに縛られていたわけではない。常に将来を見据え考えて来たのだ。「40年前に始めた事業を継続し、それを履行するだけでは事足りない。」と1993年までの実績の総決算を行った時に強調された。「新しい視野を見極め、現代に適応していくことが条件となっている。常に革新に向かって一步踏み出さねばならない事を理解しなければならない。」

事実、その時期に、アルモニア学園の竣工によって大きな前進を遂げた。それは、40年前のアルモニア学生寮の設立以来、効果的に受け継いできた趣旨に基づいたものであった。

この事業に先だって、もう一つの前進を紹介する。それは学生寮を現状に適応させる事業である。

ブラジルは経済的及び社会的に大きな変遷の時期を迎え、これに伴って移民とその家族、また教育システム、サンパウロ州内に於ける大学の分布、及び1953年以来のアルモニア学生寮の機構そのものも大きく変わったのである。第二次世界大戦終了直後はまだ目立たなかったが、ブラジルの工業化が急速に進み、就職の機会及び高収入の可能性は、都市集中化への流れを促進し、多くの移民達の家族は都会又はその近郊に移動していき、州内奥地の都市にも大学が普及していったのである。

ブラジル及びサンパウロの新しい経済及び社会環境は、大学に進学する日本人の子弟に宿舎を提供するという学生寮の需要も低下したと見えた。

逆説的に、需要増強に応える為に拡張した学生寮は、収容能力過多の様にも思われた。1980年代には、200人もの寮生を収容していた時期もあり、これは先駆者達が寮生全員に行き届いた管理が出来る、と想定していた枠を遙かに超えていたのだった。

「寮生の中には勉学を目的としたものではなく、寮をホテル代わりに利用していた者まで居た。」と、当時の学生会理事長であった破魔浩一郎は回想する。寮生達の性格、目的、要望、行動が理事会の考えとは異なる問題が起こり始めたのだった。「200人の若者の秩序を保つ、という事は至難の業であった。どんちゃん騒ぎはやるし、廊下で食事の用意をしたりする。」と本誌に証言した。この時こそ、理事会が重要な決断を迫れた瞬間であった：寮生の数を大幅に減らし、当初の目的及び秩序を回復すること。寮生を個人的に面接し、その数を半分に減らした。残ったのは、実際に勉学に励む寮生だけとなった。

ところが、国の諸般の状況の変化と共に、学生寮に対する需要は減少傾向に向かい、学生寮を維持する必要性すらも薄らいで来た。そこで、理事会は、創立者達の理想に最も適合した選択をしたのである。

責任ある市民の育成を目指し、若者たちに独自の教育と養成を施すこと。

そこから、破魔浩一郎が言う「日本移民の誇り」を基本とする質の高い正規の教育を目指す学園プロジェクトが生まれたのである。これは、和田忠義が言う通り、方針の変化を意味するものではなく、学生会の第1回目の定款にも学園構想が既に織り込まれていたのである。

このプロジェクトを実現させるため、学生会に所属する教職者は、移民コミュニティが維持する、ミゲル・セルヴァンテス校（スペイン系）、ダンテ・アリゲーリ（イタリア系）、ポルト・セグロ（ドイツ系）その他を視察し、アルモニア学園の組織の参考とした。

学生寮の創立40周年記念誌には、アルモニア学園の理念を次のように要約している：

「新しい学園は、アルモニア学生寮の過去の栄光を集約させ、将来を見据えて、教育の最も進んだ理想に基づき想起されたものである。それは、生徒の潜在能力を最大限に発揮させること、調和性、人格の尊厳、均衡の保持、日常を対処する感性の育成である。こうして自らの体験の中から、知識は蓄積されていき、生徒自身が勉学の媒体となるのである。そのためアルモニア学園は、多様そして活動的なカリキュラムを有し、年間延べ授業時間が他校より長く設定されている。」

この理念を維持し、基礎から生徒に伝授するため、アルモニア学園の成長の歩みは鈍かった。「我々の理想を育むために時間がかかる事は、初めから解っていた。これは幼稚園から始めなければならない。」と、アルモニア理事長の和田忠義は言う。そのため、設立当初は各学年1クラスしかなく、初等科の9年生に至るまでは、毎年一クラスずつ増やしていったのである。その後、一年間の時間的余裕を空けて、中等教育（高等学校）を開始した。現在、学園は全課程が整備され、370人の生徒が在籍している。

他の学校と大きく異なる点は、日本語を必須科目としている事である。ただし、それだけではない。「終日制の学校」である。他にも終日制はあるが、中でもアルモニアは独自の授業を提供する。午前中に正規の授業を実施し、午後は全部自由時間で娯楽に当てるものではない。「終日教養、授業、復習、実習」だと和田は言う。

通常の授業以外に、アルモニアは日系コミュニティでは広く知られている活動も取り入れている：柔道、剣道、活け花、折り紙、鯉のぼり祭り（端午の節句）、雛祭り（上巳の節句）など。以前は、中国伝来で二人が台を挟み、技を競う囲碁の手解きまでやっていた。

だが、ここは従来の「日本語学校」ではない。仮にそうであっても、単なる因襲的な日本語の学習とは異なるものである。「日本語学校は、単に日本語を習得するだけでない。」学生会の創立者の一人であり、アルモニアの最も活動的な評議員で、格調の高い日本文学の研究者、日系社会に於ける日本文化の伝承と普及に弛まない努力を傾倒している大浦文雄は、本誌のインタビューに応じ、「この学園では、より広い世界を勉強する事が出来る。それを私は常に強調し、現在もアルモニアはそれを維持するよう力を注いでいる。」と語った。「我々は、情報として教えているのではなく、教養に重点を置いているのだ。」

と和田は強調する。そのため、この学園の教師たちに対し、秩序という価値を与え、時間厳守を生徒に躡けるよう指導している。生徒達は、日本人同士ではごく当たり前の行動、礼儀正しく挨拶すること、食事の時の感謝の念、尊敬、

清潔感など、「普遍的な事であるが、段々我々の中でも失われつつあるもの」を学ぶ。

アルモニア学園が、欧米諸国を代表する教育機関としてブラジル社会一般に定着したこの実績は、創立者達がただひたすらに、日本移民の民族的価値及び文化の調和と統合を求めた結果が、最も効果的に表されたものではないだろうか。

多くの生徒の保護者たちが考えたように、ここは単なる「日本語学校」ではない。アルモニア学園が非日系として幅広く認識されるようになった — その教育の大部分が、日本移民が尊重している理念を基本としているにも拘わらず — ことで、需要が伸び、アルモニア学園も大きく躍進することができた。

ではどうして、従来の「日本語学校」ではない事を知りながら、子弟達をアルモニアに入学させたのか？アルモニアの和田理事長は次のように述べる。「保護者達の考え方を聞くと、秩序と尊敬を基本とした日本的な文化構成を子弟たちに習得させたい。」現在、生徒の約「80%」は非日系人である。けれども、全員が日本語を習い、日本語能力試験を受ける事を義務付けられているのだ。同様に、アルモニアの教師に日系人は少ない。

「日系の教師は、一人か二人」と理事長の和田は言う。日系の教師の数が少ないのは、学園管理者の意思ではない。教師自身の選択で、私立校よりも雇用関係が安定している公立校を優先しているのではないかと予想する。その選択肢以外に、私立校への希望者が少ないのは、職業義務履行の問題がある。アルモニアの場合、公立校に比べて遙かに厳しいものを要求している。「教師には教育に専念して貰わねばならない。その点でも、学園のユニホームを着て貰いたい。」と理事長は言い切る。

アルモニア学園は、種々のプログラムを通じ、日本の公的教育機関と協定を結んでいる。スポーツ分野では、レベルの高い国際幼年サッカー大会を計18回も開催し、その試合に参加した選手の中には、その後スポーツ界で名を馳せたカカ、ロビーニョ、ジエゴとマグロンなどもいた。これらの大会には、サンパウロ州の大手サッカークラブのコリンチアンス、サンパウロ、サントス、パルメイラス、また日本からは毎年、奈良、千葉、札幌などの各市から同年代の選手が参加する。

交流プログラムでは、アルモニアのグループが日本各地を、日本の実習生がブラジル各地を訪問する機会を提供している。またJICAを通じ、日本の教師たちがブラジルの教育事情を視察、ポルトガル語を習得することで、日本に滞在する出稼ぎ者の子弟たちの指導に当たっている。JICA派遣の教師たちは、通常一年から一年半の間ブラジルに滞在する。

学園の全てのプログラムを遂行する唯一の安定した資金源は、生徒からの月謝収入であるため、常に資金的均衡に留意し — 時には苦しい資金繰りに悩まされたが — 運営をしている。アルモニア学園は、特に巨大化する事を望んでいない。運営団体の理事長である和田忠義は、以前、寄宿生の部屋を改造して教室にすれば500人規模の学園が出来ると言っていた。

「学園をこれ以上大きくする事は望まない。私達のプロジェクトは、教育の質に重点を置く事である。」と根拠を説明し、アルモニアを優秀な学園にしたいのが私達の目的である、と続けた。アルモニアは競争率の高い大学入試に向けて、学生の養成を目指す大規模の高校とは競争しない。「これらの高校や予備校と競争を始めれば、アルモニアが目指す最も重要な趣旨を放棄することになり、教育のレベルは低下し、普通の高校となってしまう。」と、アルモニアの評議会のメンバーである渡部和夫は言う。

アルモニアが目指すものは、創立当初から一貫して、高校を巨大化して商業

的に利益を追求するものではなく、質の高い教育と日本的な価値の伝承にある。

2008年、ブラジル日本移民百周年記念の年にアルモニア学園は、児童向けに1,800平米の校舎を竣工させた。これは「新アルモニア学園」構想の一部で、ブラジル社会に日本移民が持ち込んだ、日本的な価値を広く普及させるためのモデル校を目指したものである。

研究者である宮尾進が2005年に発表した論文で、茶道、活け花のような日本の伝統芸術の伝承と普及を含め — 日伯学園建設を最優先にすること — と強調した。その通りであるが、我々はそれ以上のものを求める。

日本移民の研究では、最高峰の権威と評される人文研、そこから発表した宮尾進の意見は、「この学園は、教育機関の趣旨として、ブラジル社会の発展に寄与出来るような日本文化の本質を育んでいかねばならない。」というもの。それを学生に伝え、体得させることで普及していくという事だ。

「これによって、全ての欧米諸国が統合された新しいブラジル文化の形成に、日本文化の特質が活かされる事になる。」大浦文雄の人生と行動は、実質的に、宮尾が主張する教育分野に於ける挑戦を表しているのではないだろうか。高齢のためアルモニアを含め、公職からすべて退いている大浦は、宮尾の意見に感銘し、これは紙上に残すだけではなく、必ず実現させなければならないと主張した。これは決して実現不可能なプロジェクトではない。日本移民90周年記念の一環として、フェルナンド・エンリッケ・カルドーゾ大統領と橋本竜太郎総理が、ブラジリアに於いて両国が提携して日伯学園を設立する事で合意に達した。

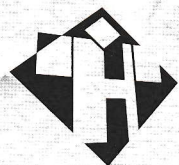
大浦は、数十年前アルモニアの土地購入に協力した事を回想し、日本移民百周年の2008年に宮尾の構想の実現に適しているのではないかと現地を訪れている。以後、アルモニアの活動に定期的に参加している。日伯学園実現のため何回か日本を訪れ、橋本、小泉元総理その他高官と会談する機会を持った。

過去に於いて幾多の壁を乗り越えてきたように、将来を構築するための戦いはこれからも継続する。そのために、アルモニアは支援を必要としている。例えば、現在3,000人を数える元寮生が支援団体を結成し、支援活動を展開する事も一つの考え方である。また、諸外国政府が行っているブラジルの移民社会に自国の言語及び文化普及のために支援し、大きな成果をあげているように、日本政府からも同様の支援を受ける事が必要不可欠である。更に、他の機会にも温かい手を差伸べてくれた、移民事業とは直接関係がない企業及び企業家の協力も大いに期待したい。

アルモニア及びその運営者は、ブラジルを変えようという大それた意思は持っていない。しかしながら、教育分野に於いてそのレベルアップに供する規範が現実のものとなり、他地域に広める事によってブラジル社会に於いて融和した共存〈アルモニア〉及び国の発展に繋がれば、日本移民及びその子孫が何らかの貢献をしたことになる。この国が、良くなる為に貢献したという事になるのだ。



Jorge Okubaro, jornalista, editorialista do jornal O Estado de São Paulo.



Harmonia
Educação e Cultura